



〈 解 説 〉

ビャクシン

(ヒノキ科ビャクシン属の種, 別名: イブキ, 学名: *Juniperus chinensis* L.)

この種は樹高2.5mにも達する雌雄異株の常緑針葉高木で、本州宮城県以南から四国、九州、沖縄、さらには韓国、中国に分布します。この種は日当たりの良い砂質立地を好んで生育するので、海岸近くに自生が多く見られます。樹形は美しい円錐形で、樹皮は赤褐色で縦に裂け、剥がれます。葉には鱗片状のものがほぼ交互対生に小枝に密着し、一見、細い棒状のものと刺状のものとの2形があります。この種の別名であるイブキは茨城県高萩の伊吹山に多いことに由来するそうです。また、学名の種小名である *chinensis* は「中国産の」と言う意味ですが、中国の大部分の地域には自生はなく、庭に栽培されているものがほとんどだそうです。そして、この材を棺材として利用するのだそうです。この種の日本での用途は、樹形の美しさから庭園樹や生け垣として植栽することが最も多いようです。しかし、この種が「ナシ」の葉に付く有害な担子菌である「赤星病」の寄主植物であるために、ナシ栽培農家からはたいへんに嫌われます。ナシ農園が多くある地域では、この種の植栽が規制されているところもあります。また、材は美しく加工しやすいことから、床柱、装飾材、彫刻材などに利用され、芳香があるので鉛筆材としても使われているようです。生け垣として普通に見かけるカイヅカイブキはこの種の園芸品種です。両者は、ビャクシンは枝がねじれないのに対して、カイヅカイブキの枝は螺旋状に幹に巻き付くようになっているのですぐ区別できます。